

サファヴィー朝ムハンマド・フダーバンダ時代の宮廷と儀礼

後藤 裕加子

はじめに

第2代シャー・タフマースプ（1524-1576）の長い治世が終わると、第5代シャー・アッバース（1588-1629）が即位するまでの12年間、サファヴィー朝は政治的に混乱に陥った。極端な恐怖政治を行ったイスマーイール2世（1576-1578）が暗殺された後を継いだのは、彼の兄でタフマースプの長男ムハンマド・フダーバンダ（1578-1588）であった。ムハンマド・フダーバンダはほとんど視力がなく、政治処理能力がないと見なされていたことが幸いして、イスマーイール2世による近親者暗殺を免れていた。しかしながら新しいシャーは視力のこともあり、政治にはほとんど関心を示すことはなく、第二次内乱期とも称されるキジルバーシュ勢力の専横と部族間争いが再び激化することになった。

サファヴィー朝は神秘主義教団のサファヴィー教団を母体とし、その信徒集団であるキジルバーシュの軍事力を活用して世俗支配を獲得したが、国家建設が成って以降は、あらゆる手段を取ってキジルバーシュ勢力を抑え、十二イマーム派を国教とする穏健な世俗国家への転換を図っていった。その過程については、さまざまな角度から論じられている。これらの研究は、十二イマーム派採用にあたっての宗教政策と、有力キジルバーシュ勢力排除を狙った政策を論じたものの2つに大別され、後者は更にシャーを核とする諸勢力の政権闘争に焦点を絞ったもの、サファヴィー家とキジルバーシュの神秘主義教団のムルシド・カーミルとムリードの關係に着目したものに分けることができよう¹⁾。

1) 教学の面ではシリアから十二イマーム派のウラマーが招聘されたことがよく知られているが、Abisaab 2004 は、サファヴィー朝がイスマーイール1世時代からシャー・アッバース時代までに十二イマーム派国家へ変容していく過程で、ウラマーが果たした役割を総合的に論じる最新の概説書。なかでも最初に移住した al-Karaki に関する個別研究として Newman 1993 がある。サファヴィー朝時代のシーア派の儀式・行事に関しては、Calmard 1993 および 1996 のうち、後者はヨーロッパ人の旅行記に記録されたシーア派の儀式（主にアーシューラー）からサファヴィー朝のシーア派化の様子を明らかにした。守川知子 1997 はタフマースプによるイラン都市社会のシーア派化政策について検討した。羽田 1978 は十二イマーム派の国教への採用が、キジルバーシュの過激シーア派色を払拭するためであったとする。羽田 1984, 1987 はタフマースプがキジルバーシュ諸部族間の対立を利用しつつ、有力部族を抑えようとし、またタジク官僚を優遇していった過程を明らかにした。Savory 1965 は、イスマーイール1世時代からイスマーイール2世

サファヴィー家とそれを取り巻くキジルバーシュを中心とする支配者層集団との関係の、別の側面に焦点をあてたものとして、16世紀のサファヴィー家の婚姻関係と王族の女性の活動に注目した Szuppe の一連の研究があげられる。しかし、これらの研究における Szuppe の関心は、第一に女性の政治への参加、第二に王家と姻戚関係にあったキジルバーシュの有力家系のアミールの経歴にあり、王家とイラン系有力者との間に成立した婚姻関係の政治的意図の分析は二義的なものとなっている²⁾。具体的には、ムハンマド・フダーバンダ時代の初期に彼にかわって国事を担ったのは、マーザングラーン地方を支配していたマルアシー家出身の王妃ハイル・アル・ニサー・ベグム Khayr al-Nisā Begum で、彼女はキジルバーシュとの勢力争いの結果、後者に惨殺される。彼女の政治活動について Szuppe は詳細に描写するものの、イラン系定住民の女性が宮廷で政治的な発言権を持ちえるまでの経緯や、彼女の活動と暗殺がその後のサファヴィー宮廷に与えた影響についてはほとんど考察がされていない³⁾。

統治への熱意を失い、キジルバーシュの有力アミールの繰り人形となっていたムハンマド・フダーバンダを廃位させて新しいシャーとして即位したアッバースは、各種の改革を断行し、サファヴィー朝の中央集権化に成功した。それまでの歴代シャーがトルクマーン系部族出身者を母にもっていたのと異なり⁴⁾、イラン系有力家系出身者のハイル・アル・ニサー・ベグムを母とするアッバースの即位は、宮廷における王家と有力者たちの関係にも新局面をもたらした。

ムハンマド・フダーバンダの短い治世は、対外的にはオスマン帝国やウズベクの侵攻により大幅に領土を喪失し、内政では絶え間ない政権闘争に明け暮れた。しかし、この時代にもイスマーイール1世時代からの政策が継承され、キジルバーシュ的過激シエア派から十二イマーム派への転換が進行し、宮廷においてはキジルバーシュの伝統にかわってペルシア的＝イスラーム的な伝統が浸透しつつあった。本稿は最初にムハンマド・フダーバンダ時代を中心に、サファヴィー家とそれを取り巻く宮廷人たちの関係を婚姻政策を軸に分析し、その上

↙ 時代にかけてサファヴィー教団のスーフィーたちを束ねる職務である大ハリーフ職が、タジク人官僚の登用を通じて宮廷内での実権を剥奪させられていく様子を描く。

2) 当時の定住系のエスニック集団をどう呼ぶかについては論議となるところであるが、本稿で主に取り扱う定住民は地方支配者の一族で、史料中でタジクと呼ばれる官僚とは若干性格を異にするので、タジク人官僚とあえて区別するためにイラン系という名称を使用することにする。

3) なお、ムハンマド・フダーバンダ時代については個別の研究はほとんど行われていないのが現状であるが、政治史に関する概説としては、Roemer 1939, 1986, 1989 および Savory 1980 がある。また、Horst 1964 にハムザ王子の執政としての立場に関する簡単な考察がある。

4) 周知のように初代イスマーイールの祖母はアク・コユル朝ウズン・ハサンの妹、母はウズン・ハサンの娘であった。タフマースプの母はマウシルルー・トルコマーン族出身の Tajlū Khānum、イスマーイール2世とムハンマド・フダーバンダの母もまたマウシルルー・トルコマーン族出身の Sulṭānum Khānum である。Szuppe 1995 の表1および表2を参照。

で宮廷という、王のより私的な空間を共有する場において、サファヴィー家が神秘主義教団の教団長としての立脚点を脱し、新しい統治原理でキジルバーシュをはじめとする宮廷内部諸勢力を統制しようと模索していた、その過程と成果の一端を宮廷での儀礼や行事を通じて明らかにすることを目的とする。

I サファヴィー家とイラン系有力者との婚姻政策

1 王妃ハイル・アル・ニサー・ベグムの誕生まで

本章では、サファヴィー家の婚姻政策の分析から、同家のキジルバーシュ依存からの脱却の試みを考察していく。Szuppe は史料中に登場する 16 世紀のサファヴィー家の婚姻関係を整理し、抽出した女性全 49 名（王族の女性だけでなく、サファヴィー家に興入れした女性も含む）の家族構成と履歴などについて多角的に分析している。サファヴィー家の婚姻は同盟関係の強化を目的とした政治・外交政策の一環として行われ、時代ごとの政治状況が反映されていることが論じられている。サファヴィー家の外戚の家系としては、1. トルクマン系諸部族、2. 宗教的権威をまとった地方名士、3. イラン北部の地方王朝の一族の 3 つに分類されている。ここでは、Szuppe の研究においてハイル・アル・ニサー・ベグムの実家であるマルアシー家の分類があいまいなこと、婚姻政策として王女の降嫁と外部からの興入れが分けて論じられていないことの 2 点を問題にしたい。

サファヴィー家の外戚の第 2 グループの地方名士に分類されているのは、ヤズドの神秘主義教団であるニーマトゥラー教団の祖シャー・ニーマトゥラー・ヴァリー・ケルマーニーの子孫のニーマトゥラー一族で、第 3 グループのイラン北部の地方王朝の一族としては、サファヴィー朝勃興時にアゼルバイジャンの隣接地域で独立政権を営んでいた、シールワーン、ギーラーン西部、ギーラーン東部の各地方の支配者たちとの婚姻が例として挙げられている。Szuppe はシャー・アッバースの生母ハイル・アル・ニサー・ベグムの出身家系であるマルアシー家について、本文当該節での詳しい言及をしていないので、その分類は明確ではない⁵⁾。添付された関係図 *Alliances avec les souverains locaux du Gilân et du Mâzanderân* (Table. 4-I, -II, -III) では、ギーラーンとマーザンダラーンの諸支配者たちとサファヴィー家の婚姻関係を図式化しているので、マルアシー家は北部の地方王朝の一族とみなされているようである。Szuppe がマルアシー家の分類にあいまいさを残したのにはいくつかの原因が指摘されよう。

マルアシー家はイル・ハーン朝が滅亡した後の 14 世紀半ば、カスピ海南岸のマーザンダ

5) マルアシー家の概略については、Calmard 1991 を参照のこと。また、ギーラーンのキヤー家と並ぶ、勃興期の歴史については、後藤 1999 を参照。

ラーン地方を掌握した地方王朝の支配者一族である。マーザンダラーン地方はもともと十二イマーム派を信奉する土地柄で、マルアシー家の祖であるサイド・カワーム・アッディーンは、その地で預言者ムハンマドの血を引く神秘主義教団の長として土地の住民の支持を集めていた。カスピ海南岸地方は中央からの干渉を受けにくい有利な自然条件を有し、サファヴィー朝の勃興期には大小さまざまな地方政権が存在した。このうちサファヴィー家と婚姻関係を結んだのは、上述マルアシー家、ギーラーン東部のキヤー家、ギーラーン西部のイスハーク家である。キヤー家はマルアシー家と同様にサイドの家系で、マルアシー家からの軍事援助を得て、14世紀後半にギーラーン東部で独立した。イスハーク家はおそらくイル・ハーン朝時代以前から続く土着のアミールの家系である。14世紀後半にはギーラーン東部はザイド派、ギーラーン西部はシャーフィイー派の土地であったことが確認される。

これらの3家のうちキヤー家とイスハーク家は15世紀頃からそれぞれハーンを名乗るようになっており、恐らくアク・コユンル朝時代に、その宗主権を認めた際にハーンの称号を下賜されたのであろう⁶⁾。本来、宗教的な権威やカリスマ性を政権獲得の原動力としてきたマルアシー家、キヤー家は、時間の経過とともに世俗化していった。しかし、彼らの宗教権威が本人たちや外部の人間に全く忘れ去られたわけではない。TAAAはタフマースブ時代の記述の巻末に貴顕の伝記を記録しているが、サファヴィー家と婚姻関係を結んだサイドの家系として、ニーマトッラー家と並んでイスファハーン在住のマルアシー家の子孫も紹介されている⁷⁾。

世俗の支配者と宗教権威というマルアシー家の二面性については、当時のマルアシー家のお家事情からも理解することができる。マルアシー家が支配したマーザンダラーンにはサーリー、アーモルの2つの中心都市があり、政権の成立以来、本家がサーリーを本拠地とし、分家がアーモルを中心とする地域を統治していた。しかし、サーリーの本家はたびたびアーモルの分家に干渉し、機会があれば後者を併合しようとするのが常だった。前述のイスファハーンのマルアシー家もそのような政争の末、マーザンダラーンからイスファハーンにたどり着いた一族の子孫である。ハイル・アル・ニサー・ベグムの父であるミール・アブドッラー・ハーン Mir 'Abd Allāh Khān もまた本家との確執を繰り返し、一時は東西マーザンダラーンの統一支配に成功したが、最終的に政敵 Sulṭān Murād との争いのなかで殺害さ

6) マルアシー家の場合、ハイル・アル・ニサー・ベグムの父ミール・アブドッラーは彼が東西マーザンダラーンの支配を一時的に統合した937/1530-1年頃に、シャーからハーンの称号を授けられている [TMM: 124-5]。

7) TAAA I: 147-148. 中央で書かれた年代記は、これら辺境の地方王朝のについては時々的事件史の文脈の中で記述するのみで、独立した項を立てて記述しているものはほとんどない。よって中央政権の支配者がサイドの出自であるマルアシー家、キヤー家をどのように見ていたかを推測するのは難しい。ティムール朝やアク・コユンル朝の君主が、サイドの家系であるマルアシー家やキヤー家へ一定の敬意を払ったことについては後藤1999およびGoto 2002/3参照。

れた。彼の家族はタフマースプ治下のカズウィーン宮廷に留め置かれることになった。つまり、ハイル・アル・ニサー・ベグムとムハンマド・フダーバンダの成婚時、ミール・アブドッラー・ハーンの遺児たちは支配する土地を持っていなかった⁸⁾。

ムハンマド・フダーバンダ妃となったハイル・アル・ニサー・ベグムの実家であるミール・アブドッラー・ハーン系のマルアシー家は、こと婚姻関係に関しては、地方王朝の支配者の一族としてよりも、ニーマトッラー家と同様に地方名士として扱うほうが適切なようである。このことについては後で更に論じるが、その前にサファヴィー家とイラン系地方名士との婚姻関係の特徴について、確認しておきたい。サファヴィー家は政策の一環としてさまざまな有力者と婚姻関係を結んでいる。しかし、王女が有力者のもとに降嫁するケースと有力者の家系からサファヴィー家に興入れするケースを比較するとその特徴に相違があり、サファヴィー家のキジルバーシュ政策との呼応が見て取れる。イスマール1世は建国後、譜代の集団に代わってシャームルー部とウスタージャルー部を優遇し、タフマースプはウスタージャルー部の一部やサファヴィー王族に連なるシャイハーヴァンド部を優遇することによってキジルバーシュ間の安定を図ろうとしたとされる⁹⁾。両シャールの時代にシャームルー部、ウスタージャルー部との婚姻が確認されるが、これらは王女が降嫁するケースのみで(Szuppeの論文巻末表での番号は2, 15, 25, 33)、反対に2有力部族出身の女性がサファヴィー家に興入れした例はイスマール1世時代とタフマースプ時代には全く見られない。婚姻は2つの家族の同盟を深める目的で行われるが、有力部族の女性が王家に嫁ぐということ、そしてその女性から王子が生まれるということは、その部族の王家への影響力が増すということを意味する¹⁰⁾。イスマール1世もタフマースプもシャームルー部、ウスタージャルー部を優遇する一方で、その危険性を巧みに回避していたといえよう¹¹⁾。タフマース

8) アブドッラー・ハーンの殺害の正確な日付はサファヴィー朝年代記には記録されていないが、最も詳しいTMMの前後の記述によると968/1560-1年の出来事である [TMM 144-152, 156-7]。それ以降アブドッラー・ハーン一族はずっとカズウィーン宮廷で亡命生活を送っていた。ハイル・アル・ニサー・ベグムとムハンマド・フダーバンダの結婚については'Abdiは973/1565-6年とし、KhT 2は974/1566-7年のこととする [Szuppe 1995: 91. note 184]。TAAAのハムザ王子の伝記に彼の生年は記載されていないが、前後の文脈からは1565年か1566年と推定される [Savory 1978: 208. note 12]。これを考慮すると、ハイル・アル・ニサー・ベグムとムハンマド・フダーバンダの結婚は973/1565-6年とするのが妥当と考えられる。

9) 羽田正 1987 参照。

10) Szuppeによるとトルコ系遊牧民の伝統では、女系の王族の子孫(ここではサファヴィー家王女を母に持つキジルバーシュのアミールたちがこれにあたる)も原則として王位継承権を主張する権利があり、またそれ故にアミールらはしばしば名前に mirzā の称号を持っている [Szuppe 2003: 147-8; Szuppe 1996: 79]。

11) イスマール2世は、即位した年(984/1576年)にウスタージャルー部のピール・ムハンマド・ハーン・ウスタージャルー Pīr Muḥammad Khān Ustājālū の娘 (Szuppe表の no. 10), Shamkhāl Sulṭān Cherkes の娘 (no. 11), Ḥusayn Khān Sulṭān Khanaslū の娘 (no. 12) を娶っている。10のケースについては、タフマースプ死後のハイダル王子派とイスマール王子

プとムハンマド・フダーバンダの生母は、ともに上述両部族よりは勢力面で劣ったトルコマン部族の出身で、同部族はサファヴィー家にとって、有力2部族に対する一種の対抗勢力としての役割を担っていたのであろう。

シャー・タフマースプ自身は多くのチェルケス系、グルジア系の妾を持ち、子供をもうけているが、彼の治世時代に彼の息子たちムハンマド・フダーバンダとイスマーイールの嫁取りが行われる。彼らは Szuppe の分類の第2群にあたる地方名士の娘を嫁に迎える。イスマーイールはシャー・ニマトッラーの娘 (no. 29) を (962/1554-5年)、ムハンマド・フダーバンダは 956/1549年に Mir 'Abd al-'Azīm Sayfī Ḥusaynī Gilānī の娘 (no. 8), 973/1565-6年にマルアシー家のハイル・アル・ニサー・ベグム (no. 45) を娶る。ムハンマド・フダーバンダの息子たち長男ハムザ・ミールザーと次男アッバース・ミールザー (のちのシャー・アッバース) はそれぞれ王女やイラン系有力者の娘を妻としており、キジルバーシュ有力者の女性との婚姻例は記録されていない。彼らがイラン系地方王朝の女性を娶った例も限られたもので、その時々を政情を反映している¹²⁾。ハイル・アル・ニサー・ベ

↙ 派の勢力争いの過程でのイスマーイール王子の勝利、ハイダル王子派についていたビール・ムハンマド・ハーンとイスマーイール2世との和解を象徴するものである。また、Shamkhāl Sulṭān Cherkes はイスマーイール2世の即位を後押ししたタフマースプの娘バリー・ハーン・ハヌムの叔父であり、これらの婚姻の成立はイスマーイール2世即位に際しての特殊な政治的事情を反映している。

12) ハムザは王族 Sulṭān Ḥusayn Mirzā b. Bahrām Mirza の娘 (no. 24) および宰相ミールザー・サルマーン Mirzā Salmān の娘 (no. 28) と結婚している。アッバースは即位後にロレスタン支配者 Shāhvirdī Khān 'Abbās の姉妹と結婚している。彼女はハムザと結婚していたが、アッバースはロレスタンをサファヴィー朝に従わせるために、統治5年目(1000/1591-2年)に寡婦となっていたこの女性と結婚し、サファヴィー家の女性を Shāhvirdī Khān に娶せたという [Falsafi: 212]。なお、この婚姻は Szuppe のリストには掲載されていない。アッバースは即位の年(996/1587年)に no. 24 とタフマースプの孫 (no. 22) の2人の王女と同時に結婚している。彼はまた、ギーラーンのサファヴィー朝領への併合後の 1011/1602年に、東ギーラーンの旧支配者ハーン・アフマド・ハーンの娘 (母はタフマースプの娘 Maryam Begum であり、彼の従姉妹にあたる) (no. 46) と結婚している (本稿第3章参照)。ロレスタンやギーラーンはいずれもオスマン帝国との緩衝地帯にあり、その地方王朝の王族女性との婚姻は、サファヴィー家の対オスマン帝国政策の重要な戦略のひとつでもあった [Szuppe 1994: 229]。なお、Szuppe は Szuppe 2003 で、Szuppe 1994 では触れられていなかったマルアシー家との婚姻関係の例を挙げている。ひとつは当時のマーザンダラーンの支配者スルタン・ムラードとシールワーン総督の娘 (タフマースプの姪) との婚姻である [Szuppe 2003: 146]。この婚姻はハイル・アル・ニサー・ベグムとムハンマド・フダーバンダとの婚姻と同じ 973/1565-6年に成立しており、ライバル関係にあった2系統のマルアシー家とのバランスを取った政策であろう。また Szuppe には言及がないが、彼女が史料のひとつとして用いている TMM には、同じ時にハイル・アル・ニサー・ベグムの兄弟 (名前不明) とタフマースプの娘 Maryam Begum との婚姻も記録されている。Maryam Begum は後にギーラーンの支配者ハーン・アフマド・ハーン夫人となる女性で、これが事実ならば彼女は早くに寡婦になったのだろう [Mar'ashi: 173]。また、この婚姻から、タフマースプがミール・アブドッラー・ハーン系の息子を、状況によってはマーザンダラーンの支配に復帰させる意図を持っていたと考えることも可能である。

グムがマーザンダラーンの支配者一族のマルアシー家の出身とはいえ、当時は領地と当主を失ってカズウィーン宮廷に亡命の身であったことはすでに述べた。サファヴィー家がキジルバーシュにかわる対抗勢力としてタジク人官僚を優遇していたことはさまざまに指摘されているが¹³⁾、こと地方王朝支配者に関してはその血を王家に導入して過度に彼らの影響力が増す危険性は、キジルバーシュ同様に回避していることは明らかである。

それでは、サファヴィー家が宗教的な権威を持つイラン系地方王族の女性を嫁とした、その意図は何であったのか。マーザンダラーンのマルアシー家と、同じようにサファヴィー家の外戚となった東ギーラーンのキヤー家、西ギーラーンのイスハーク家の違いを確認することで検討していきたい。前述したように、イスハーク家は代々西ギーラーンを支配してきた土着の有力アミールの家系である。一方、キヤー家とマルアシー家はどちらもサイドである。キヤー家はイスマール1世がアク・コユル朝に対して決起する以前に亡命生活を送ったところで、サファヴィー朝成立後もイスマール1世から特別の愛顧を受けていた。イスマール1世死後、サファヴィー朝はことあるごとにギーラーン併合を目論むが、これが実現するのは、アッバース時代のことである¹⁴⁾。マルアシー家に対しても同様に、サファヴィー朝は併合を目指した干渉を続ける。サファヴィー朝がマーザンダラーンの支配権をめぐる政争の敗北者であるアブドラー・ハーンを宮廷に受け入れたのは、彼を干渉のコマとして利用しようという意図もあったはずである〔註12参照〕。経緯はどうあれ、アブドラー・ハーンの娘がムハンマド・フダーバンダの妃として迎えられたのは、十二イマーム派を信奉する土地であるマーザンダラーンに基盤を持つマルアシー家の性格に由来しよう。サファヴィー朝は対キジルバーシュ政策として十二イマーム派を採用し、タフマースプはその一環でタジク官僚やサイド優遇政策を打ち出している。しかし、当時のイランではまだスンナ派信仰が圧倒的多数であった。キヤー家もマルアシー家と同じシーア派のサイドとはいえ、ギーラーン地方に優勢のザイド派であった¹⁵⁾。マルアシー家と同じようにサファヴィー家に娘を嫁がせたヤズドのニーマトラー家の場合、本来はスンナ派であったが、サファヴィー朝成立までには十二イマーム派を信奉するようになっていた¹⁶⁾。サファヴィー朝成立前後の教団の活動はまったく不明であるものの、マルアシー家はもともと神秘主義教団の教団長の家系である。もともと十二イマーム派を信奉し、サイドの血筋や神秘主義教団長の家系という宗教権威を身につけた、マルアシー家とニーマトラー家を優遇することは、

13) 例えば羽田 1987 や Savory 1964 など。

14) 註12 および註31 参照。

15) Calmard によると、キヤー家はタフマースプ時代にハーン・アフマド・ハーンが十二イマーム派に改宗したとあるが、管見の限りでは年代記史料には改宗の事実について明示した記述はみられない [Calmard 1993: 112; Spuler 1991; Monorsky 1991]。

16) ニーマトラー教団の概略については、Alger 1991 参照。

サファヴィー朝の十二イマーム派振興上での基本政策であり、その延長線上に婚姻政策があったと考えられよう。

2 王妃ハイル・アル・ニサー・ベグムとキジルバーシュの対立

TAAA にはタフマースプの愛顧を受けたサイドやシャイフの伝記が多く掲載されている。その中でなぜ、マルアシー家とニーマトッラー家がサファヴィー家に娘を興入れさせることになったか、その政治的意図を解明するには、地方名士、特に神秘主義教団の一族に対する政策について、今後更なる検討が必要であろう¹⁷⁾。また、ムハンマド・フダーバンダの即位は、イスマーイール2世時代の混乱のせいでシャーとなりうる成人王子が他に生き残っていなかったという偶然の結果にすぎない。それでも、イラン系有力者家系の出身であるハイル・アル・ニサー・ベグムが王妃となったこと、彼女が実質的に国事を担ったことは、サファヴィー朝の政治勢力図に変化を与えるきっかけとなった。

ハイル・アル・ニサー・ベグムの暗殺が、タジク系官僚を優遇しようとする王妃とキジルバーシュ諸勢力との確執の結果であったことは周知の事実である。ムハンマド・フダーバンダが即位したとき、彼とその取り巻きは女王パリー・ハーン・ハーンムをはじめとする旧勢力の一掃をはかり、平行して支持勢力を固めていった。キジルバーシュ勢力に関しては、この時には特定の部族の優遇や冷遇は観察されない。イラン系有力者については、タフマースプによって投獄されていた東ギーラーンの支配者ハーン・アフマド・ハーン Khān Aḥmad Khān が解放され、支配への復帰を許された。彼は同時にタフマースプの娘 Maryam Begum を妻に迎えた。また、アラムート城砦に投獄されていた2人のグルジア人王族 Īsā Khān Gurji と Humāyūn Khān もこの際に解放されている。前者はタフマースプの姪と結婚し、Shakki の支配を委ねられた。ニーマトッラー家の Shāh Khalīl Allāh と Shāh Ni'mat Allāh 兄弟もそれぞれイスマーイール2世の娘 Sulṭān Begum とタフマースプの娘 Khānish Khānum を妻として与えられている。婚姻政策、特に混乱が収束した後のシャーの即位時のそれは、イスマーイール2世の即位の例でも明らかなように [註11 参照]、その時点でシャーが支配確立のためにどの集団と同盟関係を結ぼうとしているかを如実に示す。ムハンマド・フダーバンダの即位に際してキジルバーシュ諸部族との通婚が全くおこなわれていないのは、サファヴィー家が特定のキジルバーシュ諸勢力との同盟を避けようとしていたことを意味していよう。また、グルジア王族との婚姻は、キジル

17) 一説では、ヌールバフシー教団の創立者一族のヌールバフシー家の Qawām al-Dīn は、タフマースプの姉妹（イスハーク家の Muẓaffal Ṣulṭān 未亡人）との結婚の申し込みを断ったため、後に投獄され、ヌールバフシーの直系一族が絶えることになったという [Bashir 2003: 189]。なお、同教団を含む主要な神秘主義教団の情勢については、Arjomand 1984: 112-119 に概略がある。

バーシュ、タジクに続く第3勢力としてのグルジア人の重用政策とみられる。シャーの外戚となった上記の3人の地方の王族たちは、*barādārī, ukhuwwat* の称号を与えられた¹⁸⁾。これらからムハンマド・フダーバンダのキジルバーシュ依存からの脱却、イラン系を主とする定住民寄りの志向を観察することができる。

国事を実質的に司っていた王妃とキジルバーシュとの対立は、主に3段階から成っている。最初の対立は、シールワーンでの対オスマン軍遠征後に、誰を新しいシールワーンのハーキムにするかで遠征に参加したアミールと王妃の意見が一致しなかったときに起こった。両者の対立は王妃が自らの父の死と一族の亡命の復讐を果たすために、アミールたちをマーザンダラーン遠征に派遣したときに決定的となる。この時のマーザンダラーンの支配者 *Mirzā Khān* は自らの生命の安全と引き換えに包囲戦に参加したアミールらに降伏するが、カズウィーンに連行される途中でアミールらの同意を得ないまま、王妃から派遣されたコルチらに殺害されたという¹⁹⁾。マーザンダラーン遠征の後、カーシャーンの住人が同地のハーキム、ムハンマド・ハーン・トルコマーン *Muḥammad Khān Turkmān* の圧政を訴えるためにカズウィーンの宮廷に赴いた。王妃が彼を罷免させると、ムハンマド・ハーン・トルコマーンは王妃の国事への介入に不満を持つキジルバーシュに合流、話し合いの結果もむなしく、最終的にキジルバーシュが通常の謁見の手続きを踏むことなしにハーレムに押し入り、王妃暗殺を強行する(987/1579年)。

ムハンマド・フダーバンダが即位した時、シャーには特に優遇するキジルバーシュ部族はなく、むしろキジルバーシュから全体に距離を置く婚姻政策を採用していた。王妃とキジルバーシュの反目から殺害に至るまでの過程でも、王妃に敵対するアミールたちに特に部族の偏りはない。シールワーン遠征、マーザンダラーン遠征、王妃殺害の3つの事件に関係した主要なアミールを列記すると以下の通りとなる²⁰⁾。

-
- 18) TAAA I: 227-8; Yazdī: 43. *barādārī* と *ukhuwwat* はどちらも「兄弟であること」を意味する単語だが、特定の官職を意味したり、何らかの恩恵が与えられるようなものではなく、シャーの外戚であることの名誉称号的な意味合いが強いと考えられる。
- 19) *Mirzā Khān* は王妃の父アブド・アッラー・ハーンを追い落とした *Mir Sulṭān Murād* の息子で、父の死後にマーザンダラーンの支配位に就いていた [TMM: 192, 255-265; TAAA I: 242-243; KhT 2: 690-694; Yazdī: 47-48; Khuld: 562-570]。TAAA と KhT 2 は、キジルバーシュのアミールらの怒りの理由に、王妃がミールザー・ハーン助命の約束を保護にして、彼を暗殺したことを挙げる。マーザンダラーンの年代記 TMM は王妃が約束した報酬を与えなかったことが原因であったとする。KhT 2 はシールワーン遠征の時に、同様の金銭的な不満がアミールらの間に生じたことを説明している。
- 20) マーザンダラーンの遠征から王妃の殺害までの経過について、サファヴィー朝の視点に立つて最も詳しい叙述があるのは TAAA で、本文のリストもこれに基づく。KhT 2 は暗殺の首謀者として7名の名を挙げる。TAAA と何らかのかたちで共通する人物は、クリー・ベク・アフシャル、シャルフ・ハーン・ズルカダル、スルタン・フサイン・ハーン・シャームルー、アミール・ハムザ・ハーン・ウスタージャー、ムハンマド・ハーン・トルコマーンの5名で、他に *Kūh-Gilūya* のハーキムの *Khalil Khān Afshār*、イシクアガシバシの *Ḥusayn-qulī Sulṭān* ⁷

- シールワーン遠征（宰相ミールザー・サルマーン Mirzā Salmān 指揮下）[TAAA I: 237]
 シャールフ・ハーン・ズルカダル Shāhrukh Khān Dhu'l-Qadar: ムフルダール
 ムハンマド・ハーン・トルコマーン: カーシャーンのハーキム
 ピール・ムハンマド・ハーン・ウスタージャルー Pir Muḥammad Khān Ustājālū (コルチバシ)
 スルタン・フサイン・ハーン・シャームルー Sulṭān Ḥusayn Khān Shāmlū:
 カズウィーンのハーキム (ヘラートのハーキムの父)
 Valī Khalīfa Shāmlū
 Musīb Khān Takkalū (ムハンマド・フダーバンダの従兄弟)
 Ismā'il-qulī Khān Qājār
 アミール・ハムザ・ハーン・ウスタージャルー Amīr Ḥamza Khān Ustājālū (コルチバシ)
- マーザンダラーン遠征 [TAAA I: 241]
 ピール・ムハンマド・ハーン
 クール・クムス・ハーン・シャームルー Qūr Khums Khān Shāmlū
 シャールフ・ハーン・ズルカダル (第2陣・最初は出征拒否)
- ハイル・アル・ニサー・ベグム殺害首謀者 [TAAA I: 248]
 シャールフ・ハーン・ズルカダル
 ピール・ムハンマド・ハーン・ウスタージャルー
 クール・クムス・ハーン・シャームルー
 ムハンマド・ハーン・トルコマーン (後から合流)
- 殺害実行者 [TAAA I: 250; Khuld: 591]
 Ṣadr al-Dīn Khān Ṣafawī
 Ḥusayn 'Alī Big Alkasan-ughlū Dhu'l-Qadar
 Imām-qulī Mīrzā Mawsillū Turkmān (王母の血縁)
- 役割不明 [TAAA I: 319]
 クリー・ベク・アフシャール Qulī Big Afshār (コルチバシ)

TAAA によれば、3つの事件すべてに関わっているのはシャールフ・ハーン・ズルカダルとピール・ムハンマド・ハーン・ウスタージャルーの2名である。殺害の首謀者としては、この2名にマーザンダラーン遠征に参加したクール・クムス・ハーンが加わる。ピール・ムハンマド・ハーンの出身部族のウスタージャルー部とクール・クムス・ハーンの出身部族のシャームルー部はサファヴィー朝成立以来の伝統的な有力部族で、両者はイスマール2世時代からコルチバシを勤める有力者であった。シャールフ・ハーン・ズルカダルもまたコルチバシでムフルダールの任にあった²¹⁾。王妃殺害の主導権を握ったのが有力部族出身

↙ Shāmlū の2名がはいる。Khuld の記述はTAAAに基づいているが、首謀者として挙げているのはクール・クムス・ハーンとムハンマド・ハーン・トルコマーンのみである。KhT 2は暗殺の実行犯の名前は挙げないが、この計画が各部族のイシクアガシバシ、コルチ、ユズバシなどに伝えられ、検討されたといひ、王妃暗殺がキジルバーシュ諸部族の大部分を巻き込んだ計画であったことを示唆する。またKhT 2によると、王妃は宰相ミールザー・サルマーンにかわって、一族のMīr Qawām al-Dīn (当時イスファハーンのハーキム)を宰相位につけようと画策し、それに危機感を持ったミールザー・サルマーンも暗殺計画に加わっていたという [TAAA I: 251-252; KhT 2: 695-697; Yazdi: 48; Khuld: 572, 583-592; TMM: 269-270]。

21) TAAA I: 227. ムフルダールの職については Tadhkirat 1943: 62, 89 参照。コルチバシについて ↗

のキジルバーシュ有力者であっても、決起にはほとんどの部族出身のアミールが関わった。実際に殺害を実行した者たちがサファヴィー家と姻戚関係にあるシャイハーヴェンド部の Şadr al-Dīn Khān Şafawī やマウシルルー・トルコマーン部の Imām-qulī Mīrzā Mawsillū Turkmān であったことは、キジルバーシュの憎悪の根の深さを示しているといえよう。これらの反乱キジルバーシュの中には、タッカルー部族の者は見られない。しかし、シャーの従兄弟にあたる、タッカルー部の有力者 Musīb Khān Takkalū もアミールたちを説き伏せることができず、サアードトアーバード庭園に集合していた反乱者たちに合流した [TAAA I: 249]。

ハイル・アル・ニサー・ベグム妃暗殺そのものはタジク優遇政策を鮮明にした王妃とキジルバーシュの対立、女性が国事に関わることへのキジルバーシュの嫌悪感が集約されて起こった特異な事件といえる。キジルバーシュの憎悪は王妃の取り巻きであったマーザンダラーン人へも向けられ、宮廷やカズウィーン市内のマーザンダラーン人の虐殺が行われた。ムハンマド・フダーバンドの即位に際して、陰のシャー擁立者である王女パリー・ハーン・ハーンムと彼女のチェルケス系の叔父が殺害された事件でもすでに明らかのように、サファヴィー家と血縁関係を結んだタジクやチェルケスなどの宮廷での勢力は目に見えて拡大しつつあり、これに危機感を抱いていたキジルバーシュ勢力は、彼らの排除のためには凶行を辞さなかった。

II ハムザ・ミールザー執政時代

1 キジルバーシュ諸勢力の動向とサファヴィー家の婚姻政策

王妃の殺害後、彼女の年長の息子ハムザ・ミールザーが目の見えない父の代理として政務を行っていくが²²⁾、この時期はサファヴィー家の権威が著しく制限された時代であった。ハムザの執政時代にキジルバーシュ諸勢力が復活したことで、キジルバーシュの一種の軍事クーデターは一時的には成功をおさめたといえよう。中でも伝統的な有力部族のシャームルー部とウスタージャルー部は宮廷での主要ポストを独占していく²³⁾。ムハンマド・フダーバンドとハムザには王妃殺害の首謀者らへの個人的な反発があっても、数日間謁見を拒否するのが精一杯で、すぐには彼らに抗うだけの力はなかった。アミールらも王妃殺害後に

↙ ては、羽田正 1984 参照。

22) ハムザ王子はムハンマド・ホダーバンドの即位の直後に wakīl-i dīwān-i 'ālā の地位に任命された [TAAA I: 226]。文書には彼の印は宰相ミールザー・サルマーンの印の上に押されるなど、ハムザが実質的に政務を行っており、外国人の目には王朝の支配者として映っていた [Horst 1964]。

23) TAAA は、ハムザの乳母がシャームルー部のスルタン・フサイン・ハーンの妻だったことを述べ、ハムザにシャームルー部への共感があったことを含んでいる [TAAA I: 258]。

シャー親子への忠誠を誓ってその地位を保障され、その地位を強化していく。

王妃殺害後に成立したサファヴィー家の婚姻の最初のもは、Amīr Khān Mawsillū Turkmān とタフマースプの娘 Fātima Sulṭān Begum のもの (no. 16) で、それまでのトルコマン部優遇の婚姻の伝統を継承したものと考えられる。また、ウスタージャー部の Salmān Khān b. Shāh ‘Alī Mīrzā がやはりタフマースプの娘を娶っている (no. 33) (988/1580-1 年) [TAAA I: 260-261]。

この婚姻成立の前後はホラーサーンのアミールらの反乱と連動した、シャームルー=ウスタージャー連合とタッカル=トルコマン連合のアミール間争いの激化した時期で、なおかつシャームルー部を中心として宮廷内の勢力構造が再編された時代であった。すでに王妃暗殺前から、ホラーサーンのアミールらは宮廷での政策に反発し、不穏な動きをみせていた。彼らの反発の主な原因としては、オスマン軍進軍で領土(ウルカ)を失ったシルワーンのアミールらのホラーサーンへの転封やアッバース王子のホラーサーンからカズウィーンへの帰還指示などが挙げられる²⁴⁾。一連の反乱の中心人物となったのは、ホラーサーンのアミール中の最有力者、ヘラートのハーキムのアリー・クリー・ハーン・シャームルー ‘Alī-qulī Khān Shāmlū で、彼の父は首都カズウィーンの前ハーキムのスルタン・フサイン・ハーン・シャームルー、母はハムザの乳母であった [註 23 参照]。当時のホラーサーンの中心地はヘラートで、アッバース王子もヘラートに滞在していた。王妃暗殺後の 988/1580-1 年初め、ホラーサーンではアリー・クリー・ハーンが、トルコマン部出身のマシュハドの前ハーキム Murṭazā-qulī Khān Purnāk Turkmān と対立、マシュハドへ進軍した。一方、宮廷ではシルワーン遠征をめぐって、Amīr Khān をリーダーとするトルコマン部とズルカダル部出身のムフルダールのシャールフ・ハーンとが対立していた。ピール・ムハンマド・ハーンをリーダーとするウスタージャー部とシャームルーの連合はシャールフ・ハーン支持にまわった。シャールフ・ハーンとピール・ムハンマド・ハーンはかつての王妃殺害の首謀者である。アリー・クリー・ハーンのマシュハド進軍の報に、トルコマン部のアミールらは宮廷内のシャームルー=ウスタージャー連合への非難を強めた。ホラーサーンに派遣されたカズウィーンの前ハーキム、スルタン・フサイン・ハーンの前息子への説得が不成功に終わったことや、ホラーサーンの新しい領地に赴く途中であったシャームルー部の Valī Khalīfa Shāmlū がアリー・クリー・ハーン派のアミールに殺害されると、タッカル=トルコマン連合はこれを利用して、シャームルーのアミール間に不和を生じさせることに成功する。Valī Khalīfa Shāmlū の息子で、ハムザの前側近のイスマーイル・クリー・ベク・シャームルー Ismā‘īl-qulī Big Shāmlū は、父の殺害に対する復讐としてスルタン・フサイ

24) シルワーンのアミールの転封については、TAAA I: 252; KhT 2: 688-689。アッバース帰還命令については、TAAA I: 244; KhT 2: 691 を参照。また、アッバース王子の帰還に関する考察として、Roemer 1939: 51, Note 43 を参照。

ン・ハーンの殺害を許可され、スルタン・フサイン・ハーン夫婦は殺害される。スルタン・フサイン・ハーンにかわってカズウィーンのハーキムに任命されたイスマール・クリー・ベクは、ハムザ執政時代の重臣となっていく。イシクアガシバシの Husayn-quli Khān Shāmīū (KhT によれば王妃殺害の首謀者の一人) も殺害され、その後任イシクアガシバシには王妃殺害の首謀者の一人であったクール・クムス・ハーンが任命された²⁵⁾。

上記の複雑な勢力争いを包括すると、シャームルー部の身内の勢力争いでアミールの勢力交替はあったものの、かつての王妃暗殺の首謀者がムフルダール、イシクアガシバシなどの主要ポストを得て宮廷内での権力を確実なものとしたこと、シャームルー部とウスタージャルー部のアミールらの引き続きの優位が認められる。一方で、トルコマーン部のアミール・ハーンと宰相ミールザー・サルマーンがキジルバーシュ間の勢力争いに乗じ、勝ち残ったことがサファヴィー家との婚姻関係からも確認される²⁶⁾。

990/1582年のホラーサーン遠征に際し、ハムザと宰相ミールザー・サルマーンの娘との婚約および結婚が実現され、サファヴィー家がキジルバーシュ勢力の復活の中で、タジク優遇の試みを継続していたことが確認できる。しかし、これによる宰相の勢力伸張に警戒心を抱いたキジルバーシュ有力者たち、特に王妃殺害に関わったコルチバシのクリー・ベク・アフシャール、ムフルダールのシャールフ・ハーン、カーシャーンのハーキムのムハンマド・ハーン・トルコマーンの反発は大きかった。アミールたちがホラーサーンの反乱とそれに関連して発生したキジルバーシュの2つのグループへの分裂の原因を宰相に帰すると、シャーと王子は宰相の暗殺を容認せざるをえなかった²⁷⁾。アミールらが宰相殺害だけで満足せず、

25) TAAA I: 258-261; KhT 2: 707-708. イシクアガシバシ職については、Tadhkirat: 47; Savory: 1991.

26) アミール・ハーンと Fātima Sulṭān Begum の婚姻に関しては、TAAA では一連のタッカー＝トルコマーン対シャームルー＝ウスタージャルー対立の記述の以前に言及がある一方、事態の収束後に再度言及があり、どの時点で話が出て、また成立したのか正確なことはわからない。Yazdi では、ハムザの婚約は東ギーラーンの支配者のハーン・アフマド・ハーンらの結婚のすぐ後の早い時期に行われている [Yazdi: 44]。KhT では王妃暗殺から落ち着いた 987 年ラマダーン月 / 1579 年 10-11 月のことである。ただし、この婚姻にはシャームルー部とウスタージャルー部のアミールに反対意見が多く、成立までに数度にわたる話し合いがあったことが KhT に伝えられていて [KhT 2: 700]、アミールらの対立の間に様々な駆け引きがあったことを察することができる。ウスタージャルー部の Salmān Khān とタフマースプの娘との婚姻は、同盟のパートナーであり、この事件で実質的な利益を得たシャームルー部とのバランスを配慮したものと考えられる。TAAA によれば Salmān Khān の父 'Alī Mirzā Ustājālū はタフマースプの姉妹の子であった [TAAA I: 136]。ただし、'Alī Mirzā Ustājālū についてはほとんど記述がなく、詳細は確認できない。Szuppe は 'Alī Mirzā Ustājālū をイスマーイール 1 世の姉妹と Qara Khān Ustājālū との間に生まれた 'Abd Allāh Khān と同一人物と考えているようである [Szuppe 1995: 113, no. 15]。なお、この直後のアゼルバイジャン遠征でウスタージャルー部の実力者ビール・ムハンマド・ハーンが病死するため、ウスタージャルー部の宮廷内での勢力は一時的に後退する。

27) TAAA I: 286-289; KhT 2: 743-747; Yazdi: 63-64; Khuld: 670-678. 王妃の暗殺でホ

更に王子と宰相の娘の離婚を要求したのは、サファヴィー家のこの種の嫁取りが政治的にどのような危険をキジルバーシュにもたらすか、彼ら自身が理解していたということであろう。

2 転換期としてのタッカルー＝トルコマーン反乱とアゼルバイジャン遠征

宰相を失った後、ハムザはシャームルー部、ウスタージャルー部出身の側近への傾倒を強めていく。彼は自分の周囲の若者のうち、アリー・クリー・ハーン・ウスタージャルー‘Ali-qulī Khān Fath-ughlū Ustājālū とすでにカズウィーンのハーキムとなっていたイスマーイール・クリー・ベク・シャームルーを重用する。成人しつつあったハムザは、自分の取り巻きである若手アミールを重用することで、古参のキジルバーシュの排除を謀っていく。まず排除の対象となったのは、シャームルー部＝ウスタージャルー部と常に対立関係にあったトルコマーン部のアミールたちであった。シャールの婚族でタブリーズのハーキムのアミール・ハーン・トルコマーンが投獄、後に殺害され、代わってアリー・クリー・ハーン・ウスタージャルーがタブリーズのハーキムに任命された。これに危機感を抱いたカーシャーンのハーキムのムハンマド・ハーン・トルコマーンらタッカルー＝トルコマーン連合がカーシャーンで反乱を起こす。この反乱が鎮圧されないうちに、993/1585年にオスマン軍のエレヴァン占領の報が入り、ハムザはトルコマーン部とタッカルー部のアミールらに対オスマン遠征軍への参加を促すが、彼らの軍は到着せず、結局タブリーズをオスマン軍に明け渡すことになる [TAAA I: 310; KhT 2 : 785; Natanzi : 170; Khuld : 717]。

オスマン軍によるタブリーズ占領はサファヴィー朝にとっては手痛い軍事的な敗北となった。しかし、ここで宮廷での権力掌握に成功していた王妃殺害関係者の「その後」をたどってみると、この時期がサファヴィー家とキジルバーシュ諸勢力の関係において、一種の転換期となったことがわかる。王妃殺害の首謀者3人のうち、ウスタージャルー部の有力アミールのピール・ムハンマド・ハーンはすでに病死した [註 26 参照]。2人目のムフルダールのシャルフ・ハーンはこの時にオスマン軍の捕虜となった。暗殺事件での役割が不明ながら史料に名を連ねているクリー・ベク・アフシャルは他の数人のコルチバシとともにオスマ

ラーサーンのアミールの反乱への具体的な対策は中断していたが、ホラーサーン地方のアミールらがアッパース王子を独自に擁立すると、シャールの率いる軍隊とハムザ王子と宰相が率いる軍隊に分かれてホラーサーンに向かって進軍した。宰相はホラーサーン遠征推進派であったが、タジクの宰相が軍隊を指揮することを快く思わないアミールが多かった。また、ウスタージャルー部のアミールらはピール・ムハンマド・ハーンの病死後の復権を狙って遠征に参加していたが、ヘラート総督アリー・クリー・ハーン派のホラーサーン・アミールの有力者の中にムルシド・クリー・ハーン・ウスタージャルーがいたため、特に遠征が長引くと同部族同士で戦うことを厭うようになっていった [Savory 1964]。なお、アッパース王子の擁立がいつだったかについては、KhT と TAAA で日付が異なっており、これについて Roemer は同時代人自身にもすでにその即位の日付が不明であったのでであろうと結論づけている [Roemer 1939: 87-89]。

ン軍に寝返った²⁸⁾。

彼ら有力アミールに扇動されて実際に殺害を実行した者たち3名のうち、2名については後の動向はほとんど伝わってこない。3人目のフサイン・アリー・ベク *Ḥusayn ‘Alī Big Alkasan-ughlū Dhu’l-Qadar* のみがここに来て再登場する。オスマン軍とのタブリーズをめぐる攻防でサファヴィー朝軍が劣勢に陥っていた時、タッカルー＝トルコマン連合の反乱軍が、ハムザのいるアゼルバイジャンに向かって進軍を始めた。彼らの要求はアリー・クリー・ハーンらハムザの側近の若手の排除で、シャーは反乱軍との交渉の意向を示すが、ハムザは自らの側近をかばい、タッカルー＝トルコマン連合への強硬な姿勢を崩さなかった。この王子の態度に、王の身辺警護を任されていたキジルバーシュたちが、キジルバーシュ間の不和への当惑、自分たちがないがしろにされていることへの不満を表明しに、ハムザのもとへ直訴に向かった。キジルバーシュの中でもピールやハリーフアと呼ばれるスーフィーたちは彼らの訴えをスーフィーの献身に相応しいと称賛し、一致団結した (*dar miyāna ṣ-ūfiyān-i qizilbāsh pīr wa khalīfa mi-nāmand īn muqaddima rā ṣūfigarī wa ikhlāṣ nām nihāda ān ṭabaqa muḥtaṣsan shumurda hamgī bā yikdīgar yikdil wa yik zabān shuda qarār dādand ki ..*) [TAAA I: 328-9]。

これまで見てきたように、ムハンマド・フダーバンダ時代にはサファヴィー朝を軍事面で支えたトルコマン諸部族の世俗化が著しく、部族間、また部族内での対立も激しかった。代々のシャーは常にキジルバーシュに代わる勢力の導入をはかったが、タジクやチュルケスなどの新勢力に対抗する時には、キジルバーシュは一致団結して行動した。彼らの存亡に関わる有事に彼らをまとめるイデオロギーとなり、一方でまがいなりにもシャーへの忠誠心を保っていたのは、神秘主義教団のムルシド・カーミルとスーフィーとしての、シャーと彼らとの結びつきを象徴する伝統的なスーフィーガリー *ṣūfigarī* (スーフィーらしさ) の思想であった。スーフィーガリーについては、その実態はほとんど不明といってよい。Savory はサファヴィー教団においてスーフィーとそのネットワークを掌握するための役職としての大ハリーフア *khalīfat al-khulafā* について考察した。彼はサファヴィー教団のスーフィー組織を、ペルシア的＝イスラーム的な伝統に基づくより合理的な行政制度にかえる試み、具体的には大ハリーフアの職を宰相職 *wakil-i nafs-i nafis-i humāyūn* にかえる試みがイスマーイール1世によってなされたことを論じた。そしてイスマーイール2世と当時の大ハリーフア *Ḥusayn-qulī Khulafā Rūmlū* との対立とその結果として起こった、イスマーイール2世による後者の罷免と1,200名のスーフィーの殺害(984/1576年)が、時にシャーにも勝る影響力をスーフィーに対して行使した大ハリーフアの権威の低下とスーフィーの組織

28) TAAA I: 318-321; KhT 2: 798-800 Natanzi: 177; Khuld: 739-741. なお、首謀者3人組のうち3人目でイシクアガシバシのクール・クムス・ハーン・シャームルーは、997/1588-9年にオスマン軍の捕虜となった(終章参照)。

の衰退をまねいたと述べている [Savory 1965: 498-501]。しかし、シャーの実権の低下したムハンマド・フダーバンダ時代には、スーフィーたるキジルバーシュの発言力は相対的に回復し、両者の特別の関係は、スーフィーガリーの思想を仲立ちに、宮廷での儀式や時々言説によって形式上は常に再確認されていた。

平常、シャーとの謁見には一定の手続きが踏まれた。王妃殺害の混乱が一段落した時、シャーは初めアミールらとの謁見を拒否した。この時には、アミールたちは宮廷に集合し、ウラマーとムジュタヒドの立ちあいのもと各々が51度ずつ、ムハンマド・フダーバンダの存命中は彼のみをパードシャーと認め、ハムザを皇太子と認めることを誓った。ウラマーとムジュタヒドにより押印された宣誓書がシャーに届けられた。謁見が許されたアミールたちはムハンマド・フダーバンダの足下にキスをし、忠誠とスーフィーとしての振る舞いを守ることを表明した (bi-zabānī izhār-i 'aqīdat-i bāṭinī wa šūfigarī kardand) [TAAA I: 251-252]。一方で、支配基盤が脆弱なサファヴィー家も危機に際しては、建前ではキジルバーシュのスーフィーとしての忠誠心をバランス調整に利用しようとした。前述のオスマン軍のアゼルバイジャン侵攻の際には、ハムザはキジルバーシュの諸部族はサファヴィー家と一体のスーフィーであり、命を捧げることが彼らの忠誠の証であると説いて、離反しつつあったタッカー部とトルコマーン部の有力アミールらの忠勤を求めた [TAAA I: 306-307]。

話をもとに戻そう。スーフィーたちがハムザへの謁見を求めた話はまだ先がある。王子のもとに向かったキジルバーシュたちはスーフィーの伝統に忠実な者たちであったという。シャーを愛する者たちのアピールが知れわたるにつれて、多くのものたちが彼らのもとに集った。彼らはタウヒードの輪を形成し、サファヴィー教団の慣習として朗唱を始めた。これらキジルバーシュたちの中には、王妃殺害の実行者であるフサイン・アリー・ベクの兄弟が含まれていた。説得に応じず、ハムザの側近の処罰を望むスーフィーらへの忍耐を失ったハムザはフサイン・アリー・ベクら関係者を殺害した [TAAA I: 328-9; KhT 2: 799-800; Yazdi: 72; Natanzi: 180-182; Khuld: 760-764]。

この一連の事件からは、宮廷周辺にキジルバーシュの中にシャーへ狂信的な忠誠を持つスーフィーがまだ存在していて、一定の動員力を持っていたことが理解できる。彼らはハムザに自分たちのシャーとムルシドであることを求めるが、ハムザは彼らに、自分はシャーとムルシドの代理にすぎない、と言って彼らを諭そうとした。この逸話から、神秘的な力で彼らを導くべきムルシド、すなわちシャーの存在がスーフィーの求心力となっていたことが明らかとなる²⁹⁾。

また、このスーフィーの騒乱に王妃殺害の実行犯の一人フサイン・アリー・ベクが参加し

29) また、この発言は、外国人だけでなく、宮廷内部にハムザを実質的にシャーとみなす動きがあったことも示唆する [Horst 1964]。

ていたという事実は、Savory のいうところのペルシア的＝イスラーム的伝統の導入の体現者であった王妃の殺害に、サファヴィー朝成立を支えた教団組織の伝統の保持に固執したスーフィーが深く関わっていたこと、恐らくは政治の実権を再び掌握しようと目論んでいたキジルバーシュの有力アミールらがスーフィーを扇動・利用していたことを示唆しよう。

ハムザはここに至って母を殺した実行犯への復讐を果たした。そして、それはキジルバーシュの伝統の排除を試みるサファヴィー家の政策への抵抗運動に打撃を与えた。この事件以降も、キジルバーシュのシャーへの忠誠が問題にされる際には、その忠誠の有り様としてスーフィーガリーがスローガンとして用いられる事例は散見される。しかし、彼らが宮廷で大規模な政治的行動を起こす事例は管見の限り、この事例以降記録には残されていない。

王妃暗殺の関係者がサファヴィー家から離反、殺害されていくなかで、王妃暗殺に加担したトルコマーン部の有力者でカーシャーンのハーキムのムハンマド・ハーン・トルコマーンは、タフマースプ王子を擁立してタッカー＝トルコマーン反乱を指導していく。この反乱が最終的に鎮圧され、ハムザとシャームルー部、ウスターズルー部出身の彼の側近アミールたちの実権が確立されたと思うまもなく、ハムザは暗殺されてしまう（994/1586年）。自らに代わって政務をとっていた王妃と王子を失ったムハンマド・フダーバンダの国政は混乱を極め、彼の残りの治世はキジルバーシュ間の勢力争いに終始していく³⁰⁾。

III シャー・アッバースの宮廷と行事

ハムザの死後、彼の側近のアミールたちは幼年のアブー・ターリブ王子を皇太子に擁立し、自らの権力の保持を目論んだ。しかし、彼らに討伐されたトルコマーン部とタッカー部のアミールのみならず、他の諸地方のアミールらが、すでにアッバース王子を擁立（989/1581年）していたホラーサーンのアミールたちの支持にまわる。こうしてホラーサーンから西進したアッバースはさしたる抵抗も受けずにカズウィーンに入城し、父親のムハンマド・フダーバンダの退位によりサファヴィー朝第5代シャーとして正式に即位する。

シャー・アッバースはキジルバーシュ勢力の排除を主眼に置いた諸改革を推進した。本章では、アッバースの婚姻や初期の宮廷でのペルシア的＝イスラーム的伝統の導入の例から、これを検証する。

30) 反乱の失敗後、ムハンマド・ハーン・トルコマーンは捕らえられ、財産や封土は取り上げられたものの、ハムザの暗殺は彼の処罰に有利に働いたようである。彼はアッバースの即位の時には、新王に恭順したが、まもなく殺害される（終章参照）。994年12月22日/1586年12月4日、タブリーズ近郊で野営中にハムザは配下の理髪師に殺害される。彼の殺害については、TAAA は理髪師の個人的な恨み、彼の側近同士の争い、側近らの共謀などの説を挙げている [TAAA I: 346-350; KhT 2: 839-846]。

アッバースは即位と同時に2人の王女と結婚する。婚礼の行事は首都カズウィーンのアダトアーバード庭園と馬の広場で三日三晩催された。婚礼の後には高位のアミールらへの地位や封土の下賜が行われており、この婚礼がキジルバーシュのサファヴィー王家への忠誠を確認する儀式としても機能していたことがわかる。しかし、すでに第1章で確認したように、アッバースはキジルバーシュ諸部族出身の女性を娶ることはなかった。1011/1602年に、彼は東ギーラーンの支配者ハーン・アフマド・ハーンの一人娘 Yākhān Begum と結婚するが、これはギーラーン地方の併合後のことである。彼女の母はシャー・タフマースプの娘 Maryam Begum で、つまりアッバースとはイスラーム世界では一般的ないところということになるが、この婚姻がギーラーンのサファヴィー朝領への併合の正統性を周囲に喧伝する意図を持っていたことに疑問の余地はないであろう³¹⁾。アッバースは正妻や多くの側室を持ったが、特にグルジア王族やチュルケス王族の女性との結婚の事例が多く、キジルバーシュに代わる新勢力としてのアッバースのグルジア人重用政策とも一致する³²⁾。

歴代のシャーにより代々続けられてきた、サファヴィー家の婚姻政策、つまりサファヴィー家へのキジルバーシュの影響力の排除とタジク系有力者の優遇は、サファヴィー宮廷にイスラーム的＝ペルシア的行事や儀礼をもたらした。

ムハンマド・フダーバンダ時代には、シャーがアミールや軍の上層部とともにアーシューラーのタージーエの儀式に参加し、シャーの御前で服喪の儀式が行われるのが慣習となっていたという³³⁾。992/1584年のムハッラム月に、タブリーズのウズン・ハサンのモスクでアーシューラーの儀式が行われた時、当時、サファヴィー家の婚族として権勢を誇っていたアミール・ハーン・トルコマーンが儀式に参加せず、私邸でトルコマーン部のアミールを集めてタージーエを挙行したことは、彼がタブリーズのハーキム位から解任され、投獄される口実のひとつとなったとあり、ムハンマド・フダーバンダ時代にはアーシューラーの儀式がサファヴィー家主催の宗教行事として定着していたとみてよいだろう。

31) すでにギーラーンの併合以前、アッバースはハーン・アフマド・ハーンに Yākhān Begum の興入りを要求していたが、この婚姻の成立がギーラーン支配に与える影響を理解していたハーン・アフマド・ハーンは、この要求を拒否した。これがハーン・アフマド・ハーンの反乱とオスマン帝国下への亡命の伏線ともなっている [Fumani: 106]。また Falsafi II: 171-172 参照。

32) また、彼はチュルケス人、グルジア人の女性を好み、ハーレムにはグルジアやアルメニアから贈られた女性が数百人単位で存在し、タジクは少なかったという [Falsafi II: 211-216; Szuppe 2003: 146-147]。

33) TAAA I: 298. Calmard 1996 によるとサファヴィー朝下でのシーア派(十二イマーム派)の儀式として記録に残る最初のもは、ヨーロッパ人旅行者 Membré がタフマースプ時代のタブリーズで1540年に観察したアーシューラーの儀式である。ただし、イスマーイール1世とタフマースプがシーア派の儀式を支援したという記録はないという [Calmard 1996: 143, 163]。また、アッバースの宗教行事への態度も不明という。なお、イスマーイール2世時代とムハンマド・フダーバンダ時代は Calmard の考察対象からははずされている。

ペルシア語で書かれる年代記では、基本的に年月日は太陰暦のヒジュラ暦で表される。これはサファヴィー朝の初期の年代記も同様である。アッバース時代には多くの年代記が書かれるが、これらのいくつかでは中央アジア起源の十二支を用いた太陽暦が採用され、これを基準に章立てが行われている³⁴⁾。この十二支では3月の春分の日に元旦(ノウルーズ)が置かれ、一年が始まる。これらアッバース時代の年代記の多くは、彼より以前のシャーの時代については、ケース・バイ・ケースで十二支での年代が併記される。これが、アッバース即位の年の996/1587(亥)年からは、規則的に十二支とヒジュラ歴が併記され、原則的に冒頭にノウルーズに関する記述が叙述されるようになる³⁵⁾。ノウルーズは古代ペルシア起源の祝祭日で、イスラーム時代になっても祝われた、イラン起源の伝統的な行事である[R. Levz=C. E. Bosworth] 1991]。サファヴィー朝宮廷において、いつからノウルーズが公式に祝われるようになったのかは不明である。イスマーイール1世時代に関する最も古い史料のひとつである『歴史の友』には、912/1507年にアゼルバイジャンのホイ近郊の牧草地で、また916/1511年には征服直後のヘラートで彼がノウルーズを祝ったという記述がある。特にヘラートでは、ウズベクに勝利し、ホラーサーンを征服した直後で、盛大なものとなった³⁶⁾。しかし、アッバースが即位するまでの時期では、冬営から夏営への移り変わりを表す用語としてノウルーズの語は散見されるものの、定期的な祝祭としてのノウルーズの記録はない。

シャー・アッバースの母ハイル・アル・ニサー・ベグムはマーザンダラーンの出身であるが、この地では14世紀には春分の頃に一種の農耕祭がマルアシー家の主導で行われていた³⁷⁾。また、マーザンダラーンの近隣の東ギーラーンでも6世紀の初めに、ノウルーズを冬営地から夏営地に移動する際など、暦上の節目として使用している記録がある³⁸⁾。マーザンダラーンの地方史によると、987/1579年、ハイル・アル・ニサー・ベグムによってマーザンダラーン征服後に支配者となるべく派遣された叔父のMir 'Ali Khānはサーリーでノウ

34) これらの年代記の最も代表的なものがTAAA, KhTである。太陽暦である十二支と太陰暦であるヒジュラ暦の併記から生じる諸問題については、Glassen 1970: 78-86; Melville 2003: 78-79; McChesney 1980 参照。なお、ギーラーンの地方年代記である『ハーン史』も、ギーラーンがサファヴィー朝領へ併合された後の1006/1597-8年以降、十二支が併記されるようになる。

35) アッバースが即位した亥年は1587年3月20日に始まるが、アッバースの即位は995年シャアバーン月7日/1587年7月13日なので、亥年を即位初年とした場合には即位の年には実質的にノウルーズはない(註39参照)。

36) Habib: 485-486, 517-518. Khwādamirはサファヴィー朝軍によってヘラートが征服された時にヘラートに在住していたので[Glassen 1970: 13], ノウルーズの祝祭を直接見聞したであろう。アッバース時代の年代記では、Khuldがヘラートのノウルーズを記録している[Khuld: 202]。KhTの記録では、910/1505年(丑年)の夏営地[KhT 0: 38a], 917/1512年(申年)のヘラート[KhT 0: 49a]での祝祭がこれにあたると思われる。

37) 稲作地帯のマーザンダラーンでは、マルアシー家の監督のもとで、住民総出で田植え前の水利施設の整備や森の清掃が行われ、夜通し明かりが灯され、料理が供された[Mar'ashi: 218-219]。

38) Khani: 353 (恐らく915/1510年), 369 (916/1511年)。

ルーズを祝っている [TMM: 235-236]。

イラン系の地方王朝によって支配されていたマーザンダラーンやギーラーンの伝統と、その支配者一族の出身者を母にもつアッバースが受けたであろう影響との関連性を証明するのは不可能といえる。しかし、アッバース時代にはサファヴィー宮廷におけるノウルーズの持つ意味合いが変化する。十二支を採用したサファヴィー朝年代記で、新しい年で始まる各章の冒頭にノウルーズの記述が来ることについては上述の通りである。KhT ではイスマーイール1世時代から十二支を採用しているが、ノウルーズは冬宮から夏宮への季節移動の時期を示す指標であり、あくまでも編年での歴史叙述のために使用されているにすぎない。ノウルーズの祭りの開催を思わせる記述が見られるのは、タフマースプが亡くなる一年前の982/1575年(亥年とあるが実際には戌年)に、「庭園や牧草地や広場をバラやチューリップやジャスミンやハーブで飾り、(カズウィーンの)チェヘル・ソトゥーン・ホール*iwān-i chihir-sutūn*におおましになり、世界や人類を公正さと寛大さの春をもって成長させた」という一回のみである [KhT 0:237b]。

ムハンマド・フダーバンダ時代になると、ノウルーズの記載に関する記述が詳細になってくる。彼の宮廷では、遠征などの特別な事情がない限り、シャーは記載のある8度のノウルーズうちの4回を首都カズウィーンの宮殿のチェヘル・ソトゥーン・ホールで過ごしている。カズウィーン以外ではタブリーズという、やはり都市部で過ごしている。しかし、その記述はおおむね簡素で、特別な行事が行われたという記録は少ない。その中で特に具体的な行事が行われたという記述があるのが、989/1581(巳)年、992/1583(申)年、995/1587(亥)年の3例である。989/1581(巳)年のノウルーズは、王妃暗殺後のキジルバーシュの勢力争いが一段落し、グルジアへ遠征隊が派遣される前のことで、祭りが催され、アミールたちが参内した [KhT 0:306b]。992/1583(申)年のノウルーズはチェヘル・ソトゥーン・ホールで祝われ、アミールらが参内し、シャーの足下に接吻して忠誠を誓った [KhT 0:333a]。995/1587(亥)年のノウルーズの時には、タッカー＝トルコマン連合の反乱鎮圧のための遠征を控え、カーシャーン征服の勅令が下された [KhT 0:392b]。これらからは、ノウルーズという定期的な祝祭行事を利用しての、シャーと宮廷人との主従関係の再確認の意図を読み取ることが可能であろう。しかし、ムハンマド・フダーバンダ時代は短く、また争いが絶えない時代であったこともあり、ノウルーズの祝祭行事はあくまでサファヴィー家と宮廷関係者の私的な空間での行事にとどまっているという印象が強い。ノウルーズがより多くの対象を意識した、公式行事の要素を強めていくのは、アッバースの時代のことである。

アッバース時代に関しては、KhT では彼がアミールらによってホラーサーンの支配位に就けられて以後の989/1581(巳)年から、ノウルーズの記載が行われる。ムハンマド・フダーバンダの後を継いでシャーとなってからのアッバースは、父同様に、遠征などの特別な事情がない限り、ノウルーズの期間は首都に滞在している。そこで盛大な祝いを催すように

表1 ノウルズ期間中のシャーの滞在地

即位からの年数	ヒジュラ暦 / 西暦 (十二支)	シャーの滞在地 (特記事項)	出典
ムハンマド・フダーバンダ時代			
1	986/ 1578 (寅年)	記載なし	KhT 0 : 280a
2	987/ 1579 (卯年)	カズウィーン (チェヘル・ソトゥーン・ホールへの到来)	KhT 0 : 291b
3	988/ 1580 (辰年)	タブリーズ (アミールの参加)	KhT 0 : 300a
4	989/ 1581 (巳年)	Maydānjūk (アゼルバイジャンの夏営地) (盛大な祭り開催。アミールやワジュールらの恭順) ヘラート (アッバース) (庭園 bāgh-i shahr)	KhT 0 : 306b
5	990/ 1582 (午年)	カズウィーン (チェヘル・ソトゥーン・ホールで祭りの開催。アミール恭順) ヘラート (アッバース) (庭園 bāgh-i shahr)	KhT 0 : 310a
6	991/ 1583 (未年)	(カズウィーン) (ヘラート) (アッバース)	KhT 0 : 317b- 318a
7	992/ 1584 (申年)	カズウィーン (チェヘル・ソトゥーン・ホール) (アミールや有力者の恭順)	KhT 0 : 333a
8	993/ 1585 (酉年)	タブリーズ	KhT 0 : 343a
9	994/ 1596 (戌年)	記載なし (KhT 2 では未年と誤記)	KhT 2 : 773
10	995/ 1587 (亥年)	カズウィーン (チェヘル・ソトゥーン・ホールで王子やアミールらと祝う) マシュハド (アッバース) (庭園 chahār-bāgh で、アミールやサイドら恭順)	KhT 0 : 392b, 396a
シャー・アッバース時代			
1	995/ 1587 (亥年)	—— (ノウルズ後に即位)	
2	996/ 1588 (子年)	カズウィーン郊外 (即位後初のノウルズ。盛大な祝祭。ハーン、アミールや軍の恭順)	KhT 0 : 409a
3	997/ 1589 (丑年)	ダームガーン近郊 (盛大な祝祭)	KhT 0 : 413b- 414a
4	998/ 1590 (寅年)	首都イスファハーン (ナクシェ・ジャハーンで盛大な祝祭。アミールや高官の恭順)	KhT 0 : 421b
5	999/ 1591 (卯年)	首都カズウィーン (サアードトアーバード庭園で数日間の祝祭)	KhT 0 : 428b ; TAAA I : 439
6	1000/ 1592 (辰年) 1000/ 1592 (辰年)	カズウィーン (チェヘル・ソトゥーン・ホールで祝祭) なし (対オスマンでアルダビールの墓参りも不可)	KhT 0 : 434a TAAA I : 447
7	1001/ 1593 (巳年)	カズウィーン (正月の祭りのためにイスファハーンから帰還)	TAAA I : 459
8	1002/ 1594 (午年)	記載なし (ギーラーンで狩り)	TAAA I : 491
9	1003/ 1595 (未年)	カズウィーン (盛大な祝祭。外国の使節や王族の参加)	TAAA I : 506
10	1004/ 1596 (申年)	カズウィーン (通常通りチェヘル・ソトゥーン・ホール)	TAAA I : 518
11	1005/ 1597 (酉年)	カズウィーン (雪のため数日間延期)	TAAA I : 532
12	1006/ 1598 (戌年)	記載なし	TAAA I : 547
13	1007/ 1599 (亥年)	イスファハーン (ナクシェ・ジャハーン庭園でアミールら饗応)	TAAA I : 589
14	1008/ 1600 (子年)	マシュハド (広場でボロ競技観戦。マルヴで十二イマーム派のフトバ)	TAAA I : 598

表1 ノウルーズ期間中のシャーの滞在地 (続き)

即位からの年数	ヒジュラ暦 / 西暦 (十二支)	シャーの滞在地 (特記事項)	出典
シャー・アッバース時代			
15	1009/ 1601 (丑年)	イスファハーン (通常通り)	TAAA II : 609
16	1010/ 1602 (寅年)	記載なし	TAAA II : 619
17	1011/ 1603 (卯年)	イスファハーン (ナグシェ・ジャハーン庭園の点灯)	TAAA II : 634
18	1012/ 1604 (辰年)	なし (エレヴァン包囲戦) (6月アッシュューラー)	TAAA II : 652
19	1013/ 1605 (巳年)	タブリーズ (通常通り。アミール、サドル、宰相からシャーへ贈り物)	TAAA II : 676
20	1014/ 1606 (午年)	カラバグのキャンプ地で	TAAA II : 713
21	1015/ 1607 (未年)	なし (グルジア遠征中)	TAAA II : 737
22	1016/ 1608 (申年)	記載なし (在マーザンダラーン)	TAAA II : 763
23	1617/ 1609 (酉年)	イスファハーン (ナグシェ・ジャハーン庭園に水路建設)	TAAA II : 780
24	1618/ 1610 (戌年)	記載なし (カラバグで狩り)	TAAA II : 806
25	1020/ 1611 (亥年)	イスファハーン (アッシュューラーと同時で正月延期。ナグシェ・ジャハーン庭園) (ファラフアーバード建設)	TAAA II : 829-830
26	1021/ 1612 (子年)	記載なし (在マーザンダラーン) (マーザンダラーンのアシュラフの建設活動)	TAAA II : 853
27	1022/ 1613 (丑年)	記載なし (在ファラフアーバード)	TAAA II : 861
28	1023/ 1614 (寅年)	移動中の陣営で (グルジア遠征) (グルジア関係の任命)	TAAA II : 873
29	1024/ 1615 (卯年)	記載なし (在マーザンダラーン)	TAAA II : 886
30	1025/ 1616 (辰年)	なし (グルジア遠征のため)	TAAA II : 897
31	1026/ 1617 (巳年)	冬のキャンプ地 Dāniqī (遠征中のため)	TAAA II : 920
32	1027/ 1618 (午年)	記載なし (在ファラフアーバード)	TAAA II : 930
33	1028/ 1619 (未年)	アシュラフ	TAAA II : 944
34	1029/ 1620 (申年)	イスファハーン	TAAA II : 948
35	1030/ 1621 (酉年)	マーザンダラーン	TAAA II : 957
36	1031/ 1622 (戌年)	Ṭabas-i Gilakī (ニーシャープールへの途中)	TAAA II : 969
37	1032/ 1623 (亥年)	マーザンダラーン (政府要人の訪問)	TAAA II : 992
38	1033/ 1624 (子年)	記載なし (在カルバラー) (カルバラー, ナジャフの聖者廟を訪問・喜捨)	TAAA II : 1011
39	1034/ 1625 (丑年)	アシュラフ (要人の訪問)	TAAA II : 1023
40	1035/ 1626 (寅年)	記載なし	TAAA II : 1043
41	1036/ 1627 (卯年)	記載なし (在マーザンダラーン) (イシクアガシバシ任命)	TAAA II : 1059
42	1037/ 1628 (辰年)	アシュラフ (要人の同伴)	TAAA II : 1072

なる（表参照）³⁹⁾。

紙幅の都合で、個々のノウルーズの祝祭について詳しく検討することはできない。傾向として、アッバース時代初期のノウルーズではアミールや外国の使節がシャーを訪問し、サファヴィー家の威光を示す効果が期待されていた。同時に諸官職の任命や土地の下賜が行われ、ノウルーズという古代ペルシアに起源を溯る伝統行事が、宮廷において王家と支配者層有力者との主従関係を確認する、新たな装置として機能していることがわかる。イスファハーンに遷都した頃からは、会場となる庭園の点灯や水路の建設が行われ、住民がそこに招待されるなど、より一般にアピールするような趣向が凝らされていく。ノウルーズは数日間続き、シャーも広場を訪れたり、ポロ競技観戦を行うなど、自ら祝祭を楽しんだ。アーシューラーについては、ペルシア語で書かれた年代記にはノウルーズのような規則的な記載はない⁴⁰⁾。しかし、1020/1611年にアーシューラーとノウルーズが重なった時には、ノウルーズが延期されている。十二イマーム派を国教としたサファヴィー朝において、イスラーム的な宗教行事が地域の伝統行事に優先させられていたことを示す好例といえよう。

1020/1611年以降、アッバースは母親の故郷マーザンダラーンにアシュラフとファラフアーバードという2つの都を建設する。彼はマーザンダラーンがよほど気に入っていたのであろう、二都は彼が冬営する冬の首都となり⁴¹⁾、ノウルーズは主にマーザンダラーンで祝われるようになる。彼の死後、主要街道から外れた二都はすぐに衰退した。商業都市でもあったイスファハーンと異なり、冬の行政首都であった二都市の人口規模も限られていたこともあろうが、マーザンダラーンでのノウルーズの祝祭はより小規模で、シャーのより私的な行事となっていたようである。

39) この表はアッバースの統治時代をすべてカバーする TAAA を基準に、ムハンマド・フダーバンドア時代については KhT を主要史料に用いて作成した。近年発見されたアッバース時代の新史料 Afzal al-tawārikh の第3巻（詳しくは、Ch. Melville 1998 および 2003 参照）は今回利用できなかった。なお、併記しているヒジュラ暦の年はあくまでもノウルーズの日が含まれる年であり、年代記での十二支と併記されたヒジュラ暦の年とは必ずしも一致しない。アッバース時代初期における TAAA の年代表記が、他の年代記と一年ずれている（つまり、間違っている）ことについては、すでに McChesney がその危険性を指摘している [McChesney 1980: 60, 62-63]。原因はヒジュラ暦の年始とのすり合わせにあると考えられる。本来、アッバースが即位した1年目の亥年はヒジュラ暦 995 年ラビー II 月 / 西暦 1587 年 3 月に始まるが (KhT の場合)、ノウルーズの後に来る新しいヒジュラ年をもって新年度とすれば、亥年は 996 年となる (TAAA の場合)。本稿の表は、あくまでも実際にノウルーズのあった年 (西暦および十二支) を明らかにするもので、TAAA の表記および、これを詳細に検討した McChesney の表 [McChesney 1980: 62] とは異同があることをお断りしておく。

40) Calmard 1996 は、シャー・アッバース期以降について、ヨーロッパ人旅行者が観察した宗教行事の記録のリストを添付している。

41) Melville 1993 はシャー・アッバースの移動の範囲、頻度、ルートを時代ごとに分析し、そこからファラフアーバードとアシュラフが冬の首都としての役割を持つことを指摘している。

おわりに

996/1589年、シャー・アッバースは彼を擁立したムルシド・クリー・ハーン・ウスタージャラーを殺害し、実権を握った。彼は続けてキジルバーシュ勢力の一掃を謀っていく。王妃の殺害の首謀者の一人でもあった、カーシャーンのハーキムのムハンマド・ハーン・トルコマンもこの機会に殺害される⁴²⁾。999/1591年、オスマン軍との捕虜交換により、かつて王妃の殺害に関係した、シャルフ・ハーンとクール・クムス・ハーンがサファヴィー朝領へ送還される。クール・クムス・ハーンはアッバースの即位時にハマダンのハーキムであったが、997/1588-9年にオスマン軍の捕虜となっていた [TAAA I: 403]。シャルフ・ハーンは帰還の途中で死亡したという。一方、クール・クムス・ハーンは帰還したところを、アッバースによって殺害される⁴³⁾。アッバースは母親を殺害した有力アミールへの復讐を果たした。そして、サファヴィー家の王権を制限する存在であるキジルバーシュ勢力の排除という、歴代のシャーの政策をなし遂げていく。

イラン系女性を母にもつアッバースが即位して以降、キジルバーシュや彼らから構成されるスーフィーの勢力は著しく制限された。宮廷においてはアーシューラーやノウルーズなどペルシア的=イスラーム的な行事がサファヴィー家の王権をアピールするための手段として採用されていく。そこで確認されるシャーと臣下との結びつきは、シャーとキジルバーシュとのそれに限定されるものではなかった。サファヴィー家の婚姻政策が意図したように、宮廷ではキジルバーシュ的な伝統にかわり、ペルシア的=イスラーム的要素が浸透していった。しかし、同時にアッバースの時代には、サファヴィー朝において第3の支配者集団を構成したグルジア人やアルメニア人などの勢力が伸張していくことになる。

参考文献

- Fumani: 'Abd al-Fattāh Fūmanī (1353) 'A. Tadayyon (ed.), *Tārikh-i Gilān*. Tehran.
 Habib: Khwāndamīr (1333) J. Humā'i (ed.) *Tārikh-i Ḥabīb al-siyar fī akhbar afrād al-bashar*. IV. Tehran.
 Khani: 'Ali b. Shams al-Dīn Lāhijī (1352) M. Sotūde (ed.), *Tārikh-i Khānī*. Tehran.
 KhT 0: Qaḍī Aḥmad Ibrāhīmī Ḥusaynī Qummī, *Khulāṣat al-tawārikh*. MS. Preußische (Deutsche) Staatsbibliothek in Berlin. Standnummer 2^o 2202, Neuwerbung 1895.
 KhT 2: Qaḍī Aḥmad Ibrāhīmī Ḥusaynī Qummī (1984) E. Eshraqī (ed.), *Khulāṣat al-*

42) TAAA I: 401-2. また、アブー・ターリブ王子を擁立していた、故ハムザ王子の側近アミールたちも殺害された。

43) TAAA I: 440; KhT 3: 98. KhT は、アッバースの策謀については言及せず、彼が宮殿に足を踏み入れたところを孫に殺害されたという事実のみを伝える。

- tawārikh* II. Tehran.
- KhT 3 : Qaḍī Aḥmad Ibrahīmī Ḥusaynī Qummī (1964) H. Müller (ed.), *Die Chronik Ḥulāṣat at-Tawāriḥ des Qāzī Aḥmad Qumī. Der Abschnitt über Schah 'Abbās I.* Wiesbaden.
- Khuld : Muḥammad Yūsuf Wālih Iṣfahānī (1372) M. H. Mohaddeth (ed.) *Khuld-i barīn.* Tehran.
- Mar'ashī : Sayyid Ḥāshim al-Dīn Mar'ashī (1966) M. H. Tasbiḥī (ed.), *Tāriḫ-i Ṭabaristān wa Rūyān wa Māzandarān.* Tehran.
- Natanzi : Maḥmūd b. Hidāyat Allāh Afūshayī Naṭanzī (1350) E. Eshraqī (ed.), *Naqāwat al-āthār fī Zikr-i al-akhiyār.* Tehran.
- TAAA : Iskandar Beg Turkmān Munshī (1350) *Tāriḫ-i Āram-ārā-yi 'Abbāsī.* Tehran.
- Tadhkirat : Minorsky, V. (tr.) (1943) *Tadhkirat Al-Mulūk : A Manual of Safavid Administration.* Cambridge (repr. 1980).
- TMM : Mir Taymūr Mar'ashī (1977) M. Sotūde (ed.), *Tāriḫ-i Khāndān-i Mar'ashī-i Māzandarān.* Tehran.
- Yazdi : Jalāl al-Dīn Munajjim Yazdi (1366) S. Vahidniyā (ed.), *Tāriḫ-i 'Abbāsī.* Tehran.
- Abisaab, R. J. (2004) *Converting Persia : Religion and Power in the Safavid Empire.* London–New York.
- Alger, H. (1991) Ni 'mat-Allāhiyya. *EF* III, 44–48.
- Arjomand, S. A. (1984) *The Shadow of God and the Hidden Imam.* Chicago–London.
- Babayan, K. (1994) The Safavid Synthesis : From Qizilbash Islam to Imamite Shi'ism. *IrSt* 27, 135–161.
- Bashir, Sh. (2003) *Messianic Hopes and Mystical Visions : The Nūrbakhshīya between Medieval and Modern Islam.* South Carolina.
- Calmard, J. (1991) Mar 'ashis. *EF* VI, 510–518.
- Calmard, J. (1993) Les rituels shiites et le pouvoir. L'imposition du shiisme safavide : eulogies et malédiction canoniques. In : J. Calmard (ed.), *Etudes Safavides.* Paris–Tehran, 109–150.
- Calmard, J. (1996) Shi'i Rituals and Power II. The Consolidation of Safavid Shi'ism : Folklore and Populer Religion. In : C. Melville (ed.), *Safavid Persia : The History and Politics of an Islamic Society,* Cambridge, 139–190.
- Falsafi, N. A. (1347) *Zendegāni-ye Shāh 'Abbās Avval* II. Tehran
- Glassen, E. (ed. & tr.) (1970) *Die frühen Safawiden nach Qāzī Aḥmad Qumī.* Freiburg.
- Goto, Y. (2002/3) Timūr and Local Dynasties. In : É. M. Jeremiás (ed.), *Iran in Irano-Turkic Cultural Contacts in the 11th–17th Centuries,* Piliscsaba, 67–77.
- Horst, H. (1964) Der Ṣafawide Hamzā Mirzā. *Der Islam* 39, 90–94.
- Levz, R.– [C. E. Bosworth] (1991) Nawruz, *EF* VII. 1047.

- McChesney, R. D. (1980) A Note on Iskandar Beg's Chronology. *JNES* 39 (1), 53 – 63
- Melville, Ch. (1993) From Qars to Qandahar : The itineraries of Shah 'Abbas I (995 – 1038/1587 – 1629). In : *Etudes safavides*, 195 – 224.
- Melville, Ch. (1998) A lost Source for the Reign of Shah 'Abbas : the Afzal al-tawārikh of Fazli Khuzani Isfahani. *IrSt* 31 (2), 263 – 265.
- Melville, Ch. (2003) New Light on the Reign of Shah 'Abbās : Volume III of the Afḍāl al-tawārikh'. In : A. J. Newman (ed.), *Society and Culture in the Early Modern Middle East : Studies on Iran in the Safavid Period*. Leiden, 63 – 91.
- Minorsky, V. (1991) Lāhijān. *EF*² V, 602 – 604.
- Newman A. (1993) The Myth of the Clerical Migration to Safawid Iran. *Die Welt des Islams* 33, 66 – 112.
- Roemer, H. R. (1939) *Der Niedergang Irans nach dem Tode Isma'īls des Grausamen 1577–1581*. Würzburg–Aumühle.
- Roemer, H. R. (1986) The Safavid Period. In : P. Jackson (ed.), *Cambridge History of Iran* VI, 189 – 350.
- Roemer, H. R. (1989) *Persien auf dem Weg in die Neuzeit : Iranische Geschichte von 1350–1750*. Beirut.
- Savory, R (1964) The Significance of the political Murder of Mirzā Salmān. *Islamic Studies* 3. Karachi, 181 – 191.
- Savory, R.M. (1965) The Office of Khalifat al-Khulafā under the Ṣafawids. *JAOS* 85, 497 – 502.
- Savory, R. M. (tr.) (1978) *History of Shah 'Abbas the Great by Eskandar Beg Monshi* I–III. Colorado.
- Savory, R (1980) The Safavid state from 1524 to 1588. In : *Iran under the Safavids*, Cambridge, 50 – 75.
- Savory, R. (1991) Īshīk–ākāsī. *EF*² IV, 118.
- Spuler, B. (1991) Gilān. *EF*² II, 1111 – 1112.
- Szuppe, M. (1994) La participation des femmes de la famille royale à l'exercice du pouvoir en Iran safavide au XVI^e siècle, 1^e partie. *SIr* 23 (2), 211 – 258.
- Szuppe, M. (1995) La participation des femmes de la famille royale à l'exercice du pouvoir en Iran safavide au XVI^e siècle, 2^e partie. *SIr* 24 (1), 61 – 122.
- Szuppe, M. (1996) Kinship Ties between the Safavids and the Qizilbash Amirs in Late 16th century Iran : a Case Study of the Political Career of Members of the Sharaf ol-Din Oglī Tekelu Family. In : *Safavid Persia*, 79 – 104.
- Szuppe, M. (2003) Status, Knowledge, and Politics : Women in Sixteenth-Century Safavid Iran. In : G. Nashat & L. Beck (eds.), *Women in Iran from the Rise of Islam to 1800*, Urbana–Chicago, 140 – 169.

- 後藤裕加子（1999）カスピ海沿岸地方の二つのサイド政権の成立——西暦十四、十五世紀のイラン社会と民俗イスラム『史学雑誌』108（9），1-39.
- 羽田 正（1978）サファヴィー朝の成立『東洋史研究』37（2），24-56+2.
- 羽田 正（1984）コルチ考——十六世紀イランの近衛兵制度『史林』67（3），1-23.
- 羽田 正（1987）シャータフマースプのキジルバシュ政策『オリエント』30（2），28-46.
- 守川知子（1997）サファヴィー朝支配下の聖地マシュハド——十六世紀イランにおけるシーア派都市の変容『史林』80（2），1-41.

（関西学院大学文学部）